

香川県立保健医療大学リポジトリ

精神保健医療福祉従事者ならびにピアサポーターと 大学が協働する精神保健医療福祉に関する研究会の 活動報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 多田羅, 光美, 石原, 佳明, 國方, 弘子, Tatara, Terumi, Ishihara, Yoshiaki, Kunikata, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/236

精神保健医療福祉従事者ならびにピアサポーターと大学が協働する 精神保健医療福祉に関する研究会の活動報告

多田羅 光美^{1)*}, 石原 佳明²⁾, 國方 弘子¹⁾

¹⁾香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

²⁾訪問看護ステーションビートかがわ

A Report on Activities of the Kagawa Mental Health Study Group Performed through Collaboration among Mental Health Care/ Welfare Professionals, Peer Supporters, and University

Terumi Tatara^{1)*}, Yoshiaki Ishihara²⁾, Hiroko Kunikata¹⁾

¹⁾Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences

²⁾Visiting Nurse Station Beat Kagawa

要旨

病院ならびに地域の精神保健医療福祉従事者と大学が協働する「かがわメンタルヘルス研究会(以下、研究会)」を立ち上げ、6年が経過した。本稿では研究会の活動を整理し、今後の課題を検討した。研究会は、たとえメンタルヘルスに何らかの苦労があり生きづらさがあっても、その人が「当たり前」の場所で当たり前の暮らしを送れること」を活動の理念としている。

研究会の開催は月1回から隔月へと縮小したが、活動メンバー(以下、メンバー)は精神保健医療福祉従事者にとどまらず、香川県立保健医療大学(以下、本学)学生、地域住民、ピアサポーターへと拡充してきた。活動内容は、精神保健医療福祉に関する事例検討会、講演会や研修会の企画運営、施設見学、精神障がい者の地域生活支援に向けた研究活動やイベントへの参加、メンバー相互の情報交換・連携・親睦、地域社会への問題提言や情報発信であった。具体的には、精神障がいを正しく理解するための映画上映会等の開催、精神障がい者の支援をよりよくするための事例検討会を中心に活動してきた。研究会の特徴は多施設に勤務する多職種、研究会の理念に賛同した者が集う場であり、メンバーの変動がありながらも継続してきた。今後も活動効果を評価しピアサポーターの意見や社会のニーズを取り入れながら、ピアサポーターと共に活動を活性化すること、メンバーのニーズ調査を行い自己研鑽や自己達成を支える場として存続していくことが課題であると考えられた。

Abstract

Since the establishment of Kagawa Mental Health Study Group (SG) 6 years ago, it has been operating through collaboration among hospitals, community-based mental health care and welfare professionals, and universities. This paper summarizes the SG's activities, and discusses its future challenges. The SG performs activities based on the idea that everyone should be able to lead a normal life in normal environments even when facing difficulty due to mental health problems. Although the frequency of meetings of the group has been reduced from once monthly to once bi-monthly, its membership has expanded to students of Kagawa Prefectural University of Health Sciences (this university), community residents, and peer supporters, in addition to mental health care and welfare professionals. The group's activities are classified into 6 categories: 1) case study meetings; 2) lectures/seminars on mental health care and welfare; 3) visiting and observing related facilities; 4) participating in research activities and events to support the community lives of persons with mental disorders; 5) promoting information exchange, communication, and friendships among members; and 6) raising questions and transmitting information to society. For example, the group has mainly held screenings of films to promote understanding of mental disorders and case study meetings to improve the quality of support for affected individuals. The SG is characterized by the provision of opportunities to get together for various professionals working in different facilities and agreeing with its basic ideas. It has been maintained despite some changes in membership. In the future, it may be necessary for it to continuously evaluate the outcomes of its activities and promote them through collaboration with peer supporters, while reflecting on their opinions and social needs. It should also clarify members' needs to continue providing them with opportunities for self-improvement and accomplishment.

Key Words : 多施設多職種連携 (multi-facility and-professional liaison), 地域精神保健医療福祉 (community-based mental health care and welfare), ピアサポーターとの協働 (collaboration with peer supporters)

* 連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 多田羅光美

*Correspondence to: Terumi Tatara, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Takamatsu, Kagawa 761-0123, Japan
E-mail: tatara@chs.pref.kagawa.jp

はじめに

近年の精神保健医療福祉は、入院医療から地域医療への移行を目指して様々な改革を行ってきた。厚生労働省は精神障がい者の地域生活を支える医療の充実、地域生活支援対策の強化を改革ビジョンとして打ち出した(2004, 厚労省)¹⁾。加えて精神保健福祉法を2014年に改正し、精神障がい者の地域生活への移行を推進する医療を推進し、在宅で生活できるようなサービス体制に強化することを挙げた²⁾。香川県では2012年度から精神障がい者の地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みを行っており、具体的には地域移行・地域定着推進事業運営協議会、保健所圏域での協議会、支援者関係者研修、ピアサポーター活用事業、香川県長期入院精神障害者地域移行総合的推進体制検証事業などが展開されている⁴⁾。しかしながら、香川県の精神保健医療福祉の現状は、2016年12月において精神科病床数は3,427床(2012, 4,037床)と減少し、1年以上の入院精神障害者数は1,965名(香川県の入院精神障害者数の66.5%)、そのうち65歳以上は1,725名で香川県の入院精神障害者数全体の58.4%を占めており³⁾、長期入院高齢者が多い。地域で生活することを前提とした支援体制を構築すること、入院という形に頼らず、アウトリーチで支えることを基本とするこれらの事業⁵⁾を実施するためには、行政を中心とした取り組み以外に、住民レベルでの具体的な施設内外での多職種が連携していくことが極めて重要である。

近年ではチーム医療が謳われ、同職種はもちろん、多職種間の連携は常識となっている。しかし、現状では職種間の連携が十分とは言えず、専門職同士が情報交換を行い、連携する機会は少ない。

そこで、筆者らは「職種・組織を超えたネットワークづくり」と「誰もが住み続けることができる街づくりを考える」ために、本学教員と大学院修了生2名の3名が、かがわメンタルヘルス研究会(以下、研究会)を2011年に発足させ、活動した。研究会メンバー(以下、メンバー)は様々な場所で勤務する精神保健医療福祉専門職者約20名である。2015年に発足後5年が経過し、2013年からは、本学の地域連携推進センター事業として登録し、地域に根差した活動を行っている。そして、7年目に入り新たな活動に取り組もうと考え、研究会の活動経過を整理した。本稿では、活動の現状を報告し、今後の活動について考察する。

かがわメンタルヘルス研究会の概要

1. 研究会の理念

研究会は、「つながる」「あたりまえの場所であたりまえの暮らしを」を理念とし、たとえメンタルヘルスに何らかの苦労があり生きづらさがあっても、その人が地域の人々とつながり「あたりまえの場所であたりまえの暮

らしを」送れることを目指した活動である。メンタルヘルスに病をもつ者と精神保健医療福祉従事者と地域がつながる必要がある。このようなWAVE(うねり)を起こそうと活動を展開している。

2. 研究会の名前の由来とロゴマーク

研究会の名前は、「我が香川」という思いをこめ、平仮名にすると上から読んでも下から読んでも「わがかがわ」で、上下なく平等で自分たちが住む町「かがわ」を良くしたいという意味が込められている。

研究会のロゴマークは、中心に精神障がいをもつ当事者が位置し、その周りに精神保健医療福祉に携わる人間と社会が当事者を支えるように存在する。そして当事者がのびのびと社会の中で生きていくイメージを表現している。

3. 活動方法

2011年5月に発足し、2012年3月までは1か月に1回定例会を開催していたが、2013年5月より2か月に1回の開催に変更した。2017年5月までの活動回数は53回である。主な活動場所は本学であり、活動内容により地域の中で活動している。定例会の活動時間は18:15~19:30である。

4. 研究会の運営

本学教員の研究会代表を中心に、委員長、副委員長、運営委員、会計委員、監事などの役割をメンバーで相互に担い、任期は2年としている。本学教員は研究会代表と運営委員を担い、その他の委員はメンバーから他薦自薦にて募る。

研究会の運営にあたり、会則を作成し、研究会の運営状況に沿った内容で活動できるように定期的に見直し、総会にて審議している。

5. メンバーの状況

メンバーは精神保健医療福祉に興味関心がある者で、大学、病院、行政、地域で勤務する医療従事者および当事者である。多くのメンバーは香川県在住であるが、徳島県や岡山県からの参加もあった。所属するメンバーの職種は、看護師、薬剤師、作業療法士、精神保健福祉士、社会福祉士、相談支援員、身体障害者福祉関係者など多岐にわたり、約20名のメンバー登録がある。第1回目に参加したメンバーの多くは2013年度の映画自主上映会の運営に参加した。その後、メンバー構成の変動を経て、事例検討会を中心の活動へとシフトし、新規メンバーの入会が数名あり現在に至っている。メンバーの多くは病院勤務であるが、メンバーとして登録し活動する中で、自分の夢を実現するために職場を変えた者、新たな事業を始めた者、大学院へ進学した者が存在する。

活動内容

バーから活動内容を募り、決定するスタイルをとっている。

活動内容（表1）は、研究会代表、委員長、副委員長、運営委員が中心となって大枠を検討し、定例会にてメン

以下、内容ごとに時系列で活動内容を表1に示す。

表1 かがわメンタルヘルス研究会の活動経過

実践活動内容		2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
定例検討会		毎月第3水曜日 月1回開催 (10回開催)	毎月第3水曜日 月1回開催 (10回開催)	毎月第3水曜日 月1回開催 (11回開催)	毎月第3水曜日 月1回開催 (12回開催)	2か月に1回 第4水曜日 (6回開催)	2か月に1回 第4水曜日 (6回開催)
小 集 団 活 動	実践活動の テーマ設定から 活動実践に向け た研修会の開催	グループワーク9回実施 (本学) ①テーマの設定(病院・地域 での精神障がい者の 過ごし方を分析) ②現状の把握(病院・地域 で生活している精神障 がい者の過ごし方にお いて必要と考えられる支 援の分析) ③目標値の設定 ④原因の究明【香川県の 精神医療保健福祉の問 題の焦点化・フィッシュ ボーン(原因の見える 化)の作成】	グループワーク7回実施(本 学) ⑤対策の検討(5W1H) ⑥活動の実施(実践計画 の立案) ⑦成果の確認 ⑧活動実践を行うための 実践的方法論の研修会 開催(本学・講師本学 教員教授平木民子先 生・一般公開・2012.9)				
	偏見を減ずる ための精神保 健活動および 研修会の開催		①浦川べてるの家視察研 修(北海道浦河町・201 2.11) ②浦川べてるの家・イタリ ア視察研修報告(本学・ 2012.12・学部生参加) ③なごみの家関連施設視 察(東かがわ市・2012. 12) ④なごみの家関連施設視 察報告(本学・2013.2)	①映画自主上映会「むかし Mattoの町があった」開 催(本学・一般公開・20 13.9) ②研修会開催「精神保健 福祉法改正と精神保健 福祉のこれからの動向 (本学・講師香川県障 害福祉相談所所長久 保 賀津彦先生・一般 公開・2014.3)	①倫理研修会「利用者の よりよい意思決定を支 えるために」(本学・講師 香川大学法学部教授 平野美紀先生・一般公 開・2014.8) ②第29回ナイスハートバ ザールinかがわの行事 に参加(香川県社会就 労センター協会主催・ゆ めタウン高松・2014.8) ③精神障害者家族会視察 (地域活動支援センター むつみ会第1作業所 第2作業所・2014.11) ④包括的暴力防止プログ ラムの理論と演習の研 修会「専門職として攻撃 性を暴力に発展させな いために」(本学・講師 香川県立丸亀病院看 護師 包括的暴力防止 インストラクター 沖野一 成先生・仁木辰哉先生 一般公開・2014.12)	①第30回ナイスハートバ ザールinかがわの行事 に参加(香川県社会就 労センター協会主催・ゆ めタウン高松・2015.8) ②地域支援に関する講演 会「精神医療保険福祉 をどう変革しこれからど こを目指すかー愛南町 の実践よりー」(NPO法 人ハートinなんぐん市 市場理事財正光会 御荘病 院 院長 長野敏宏先 生・一般公開・2016.1) ③社会福祉法人朝日園の 視察(三木町・2016.2)	①講演会(シンポジウム) の開催「障がい者が語 る!ー今、わたしたちがで きることを考えようー」(本 学・講師ピアサポーター 2名・支 援 者2名・一 般 公開・2017.1)
	偏見を減ずる ための事例検 討の開催		①倫理事例検討会第1回 (本学・2012.12) ②倫理事例検討会第2回 (本学・2013.3)	①倫理事例検討会第3回 (本学・2013.5) ②倫理事例検討会第4回 (本学・2013.7) ③倫理事例検討会第5回 (本学・2013.10) ④倫理事例検討会第6回 (本学・2014.1)	①倫理事例検討会 事例 編1(本学・2014.9) ②倫理事例検討会 事例 編2(本学・2014.10) ③倫理事例検討会 事例 編3(本学・2015.1)	①事例検討会 事例編1 (本学・2015.9) ②事例検討会 事例編2 (本学・2015.11)	①事例検討会 身体障 がい者施設とのコラボー レーション 事例編(社会福 祉法人朝日園2016.7) ②事例検討会 身体障 がい者施設とのコラボー レーション(本学・2016.9)
情 報 発 信 ・ 情 報 交 換	研究活動				①浦川べてるの家の視察 研修から考える精神障 が害者支援のあり方、徳 島文理大学紀要、 2013. ⁶⁾	①精神障がい者の地域移 行・地域定着を目的とし た精神保健医療福祉専 門職の活動に関する研究 第1報ー地域生活支 援施設見学前後におけ る精神障害に対する社 会的態度の変化ー、徳 島文理大学紀要、 2014. ⁷⁾ ②精神障がい者の地域移 行・地域定着を目的とし た精神保健医療福祉専 門職の活動に関する研究 第2報ー倫理事例検 討会前後における精神 障害に対する社会的態 度の変化ー、徳島文理 大学紀要、2014. ⁸⁾	
	研究会ニュース の発行	10回発信	11回発信	13回発信	12回発信	6回発信	6回発信

1. 小集団活動

1) 実践活動のテーマ設定から活動実践に向けた研修会の開催（2011～2012）

研究会の第1回目のテーマ「参加者が考える地域において当事者が望む生活」について、グループワークを行った。結果、当事者は、①地域住民としての生活②自立した生活③自分を活かす生活④相談できる生活⑤家族との生活⑥症状の安定した生活⑦自分のペースを保てる生活を望むであろうと集約できた。このような当事者が望む生活を送ることができる地域社会の実現に向けて活動しようと、研究会は方向性を明確にした。

次に、活動目標達成のための方法として、QC(Quality Control, 以下QC)⁹⁾の活動単位である小集団活動を用い、テーマの設定、現状の把握、目標値の設定、原因の究明、対策の検討、改善の実施、成果の確認、成果の定着化と進めることを決定し、以後、このプロセスに沿って活動を行った。

2011年度は、病院勤務のメンバーから「地域が見えない」、地域で勤務しているメンバーから「病院が見えない」という意見が多数出た。そこで、地域又は病院で過ごす当事者の生活の現状を把握するために「病院・地域での精神障がい者の過ごし方」をテーマとし、グループワークを行った。結果、当事者の生活の現状から9個の問題点が浮かび上がった。9個の問題点の例を具体的に挙げると、「病院は地域の視点が少ない」「地域住民から精神障害に対する理解が得られていない」「病院と地域は連携が不足している」「対象の問題点を探して強みを見ていない」「病院に適應させることがケアの視点にな

っている」「自己決定の尊重が不十分である」などであった。

その後、9個の問題点のうち、研究会が取り組むべき重要性の高い問題点の上位3つ「地域住民から精神障害に対する理解が得られていない」「自己決定の尊重が不十分である」「病院・地域にある施設・行政機関の専門職間の連携がうまく機能していない」を取り上げ、問題点の因果関係を可視化するためにQC的問題解決技法⁹⁾の考え方をもとに、構造化と見える化を可能にするフィッシュボーン¹⁰⁾を用い、原因の究明を行った。フィッシュボーンとは、情報の全体について、構成する各部分をわかりやすく組み立て、全体と構成する各部分を、見やすく表現する魚形の図である。例として、研究会のグループワークで分析したフィッシュボーンを示す(図1)。地域又は病院で過ごす当事者の生活の現状を把握することで、専門職が当事者の生活状況を知ることができ、それをきっかけとしてメンバー相互の理解が深まるとともに、当事者を多角的にとらえることが可能となり、メンバーの視野が広がった。

3つの問題点のうちまず「地域住民から精神障がいに対する理解が得られていない」を活動テーマとした。「地域住民から精神障がいに対する理解が得られていない」問題を解決するための具体策を考えた。アイデアとして出された具体策を安全性、実現性、効果性、継続性の側面から吟味し、具体策として、「研究会が主催するイベントを開く」が挙げた。この具体策を実施するために何を、誰が、いつ、どこで、何のために、どのようにするかについて、計画を立案した。

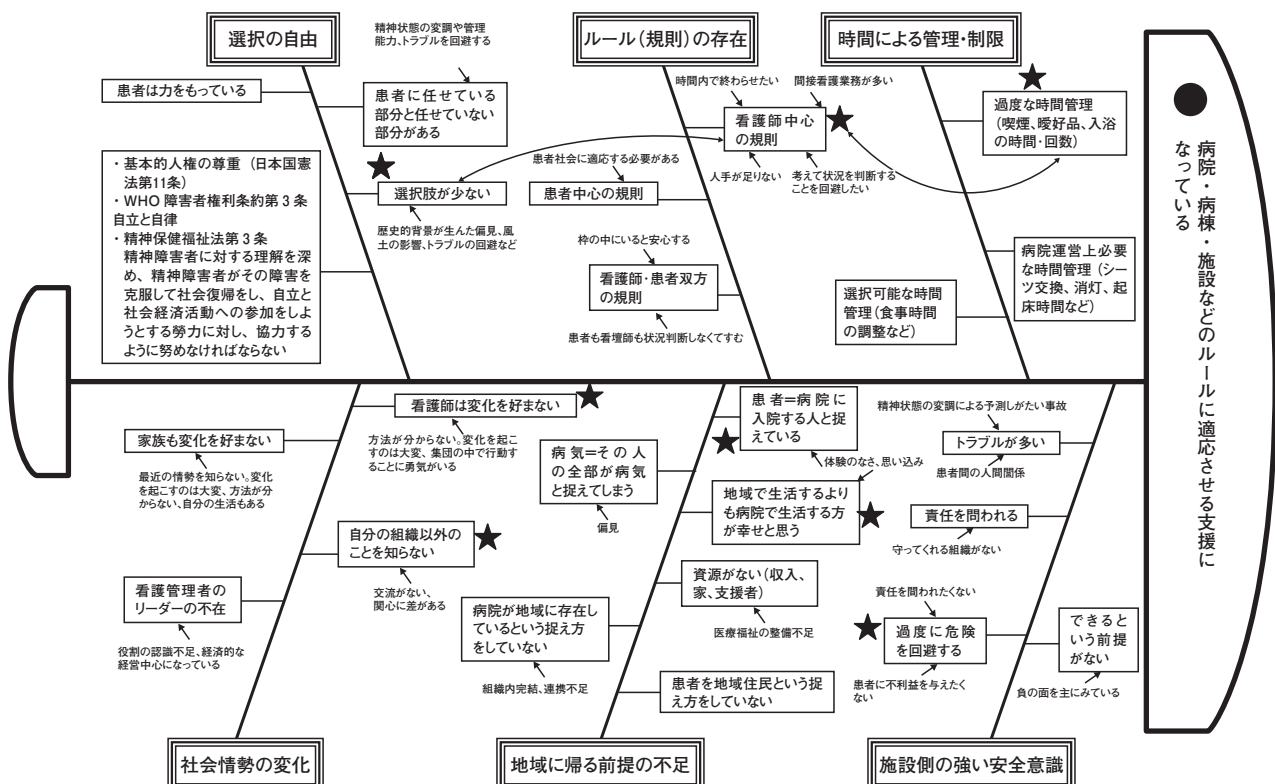


図1 問題解決志向（小集団活動）を用いた分析例：フィッシュボーン

小集団活動の方法をもとに、2012年度の活動テーマを「地域住民の偏見を減ずる」と設定した。専門職も地域住民の一人であるということから、まずは専門職の偏見を減ずることを目的とした。活動テーマに沿った活動計画、実践計画の立案を行い、実践活動として「倫理事例検討会」を中心としたグループと「偏見を減ずるためのイベントを開催する」グループにわかれて活動の企画・運営を行った。

2) 偏見を減ずるための精神保健活動および研修会・講演会の開催 (2012～)

これについての具体策では、浦川べてるの家視察研修と報告会 (2012)、NPO法人福栄なごみの会関連施設視察と報告会 (2012)、映画自主上映会「むかしMattoの町があった」の開催 (2013)、障がい者と地域社会のつながりを深める製品展示・販売「第29・30回ナイスハートバザールinかがわ」の行事に参加 (2014, 2015)、精神障がい者家族会、社会福祉施設の視察 (2014, 2015) を行った。映画自主上映会では、一般市民をはじめ81名の参加があった。映画終了後のグループワークでは映画を見ての感想を話し合い、精神障がい者が置かれた現状を改善しようと熱い意見交換がなされた。

活動を進めるための方法論を学ぶために、「戦略的変革の実践的方法論」研修会を開催 (2012) した。また、専門職として必要な知識・技術の取得のために、「精神保健福祉法改正と精神保健福祉のこれからの動向」研修会の開催 (2013)、「専門職として攻撃性を暴力に発展させないために」研修会の開催 (2014) を行った。

2015年以降は精神保健医療福祉に関する講演会活動、すなわち地域住民への啓もうへと活動を拡大し地域住民を対象とした講演会を開催した。「精神保健医療福祉をどう変革しこれからどこを目指すかー愛南町の実践よりー」の講演会の開催 (2015)、「障がい者が語る！ー今、わたしたちができることを考えようー」のシンポジウム (2016) を開催した。

これら講演会や障がい者と地域社会のつながりを深める行事では、メンバーだけではなく、大学院生、学部生がボランティアとして参加した。

3) 偏見を減ずるための事例検討の開催 (2012～)

これについての活動として、専門職も地域住民であると捉え、メンバーが所属する病院の事例を用いて倫理事例検討会を行った。内容は、「地域で生活するグループホーム利用者の事例」「総合病院精神科病棟に入院する身体合併症を併発する精神の病をもつ患者の事例」「特別改善指導場面での倫理的ジレンマに陥った事例」等であった。

2015年度からは倫理にとらわれず、幅広く事例検討を行った。内容は、「地域で生活する就労を希望する利用者への訪問看護の事例」「入院中の女性患者とのかかわり方について困っている事例」等であった。

2016年度は、身体障がい者施設とコラボレーションし、

身体障がい者施設から事例を出し、計2回の事例検討会を行った。内容は、「身体障がい者の就労継続支援の事例」「入退院を繰り返す統合失調症の人の思いを実現し、生活のはりを取り戻す事例」等であった。

また、法学を専門とする他大学教授による臨床倫理に関する研修会「臨床倫理ー利用者のよりよい意思決定を支えるためにー」(2014)を開催した。

2. 情報交換と情報発信

定例会では、会の冒頭に自己紹介や自由に話す時間を持ち、メンバー間の情報交換を行った。行政・地域で働く者、病院で働く者の相互理解のために、意図的に時間を確保し情報交換に努めた。また、研修会の情報を発信し、メンバーが研修会に参加したことを報告する機会を作った。

また、定例会の報告や情報発信をするために毎定例会を終えた後、定例会の報告と次の定例会の案内をするために研究会ニュースを作成した。2017年5月で59回発信している。毎回、メンバーが交代して執筆し、内容は、近況の報告や定例会に参加しての感想などで構成されている。このニュースレターは各メンバーにメール等で配信している。

加えて、年間の活動内容をまとめた冊子「かがわメンタルヘルス研究会の活動軌跡」(2014)、「かがわメンタルヘルス研究会総会」(2015～2017)の資料を作成し、研究会の活動について総会で報告するとともに、本研究会活動のPRに活用している。

さらに研究会のホームページやフェイスブックを開設し、精神保健医療福祉に関心をもつ者が本研究会とつながれるようにした。

3. 活動の評価

これらの研究会活動を評価するために、2014年に地域生活支援施設見学前後⁷⁾、事例検討前後⁸⁾の会員の精神障害に対する社会的態度(尺度の原文のまま表記)を測定し効果を検討した。結果、精神障害に対する社会的態度は、事例検討前後で、社会的態度合計得点と下位尺度の能力と自立の可能性の合計得点に有意差がみられた。施設見学前後では有意差は示さなかったが、多くの質問項目で否定的から肯定的な態度に変化していた。活動はメンバーからピアサポーター、一般住民へと拡大していることから、研究会の理念を反映する指標に沿って、今後、丁寧に継続評価を行う必要がある。

考 察

研究活動の現状と今後の課題

本稿では本研究会活動の中でも、研究会の理念である「つながる」に着目し、多施設多職種連携をするうえで得た示唆について考察する。

本研究会は様々な職場で勤務する者や当事者が集まる。会発足当初、参加者は初対面同士であり、「研究会は何をするのか」と緊張と不安と期待が交錯していたと考えられる。松本¹¹⁾は集団の初期段階はメンバー相互の関係が希薄で漠然とした共通感、一体感に支えられていると述べているように不安と期待の中で緊張感が生じていたと考える。初めて研究会に参加し緊張が高いと考えられる初回に、「当事者が望む生活を送ることができる社会を作ろう」と参加者の関心がある共通のテーマを話し合ったことは効果的であったと考える。また、普段職場では業務に追われ、自分は何をしたいのか、何をを目指したいのかについて考える時間は少ない状況であろう。職場から離れて立ち止まり共通の関心をもつ場に集まり自己の考えを自由に述べる、自分が所属する場と異なる参加者の考えを聞くことは新しい価値観に触れる機会になったと思われる。第1回目に参加した多くのメンバーは、2013年度の映画自主上映会の運営に参加した。このことから研究会第1回目に研究会の方向性を皆で考え、小集団活動の方法を用いて3つの問題点について実践し自主映画上映会を開催できたことは、結束力を生み出したと考えられた。

研究会活動の6年間は松本が述べるグループプロセス¹¹⁾に当てはめて考えると、不安と期待をもって研究会に参加した多施設多職種からなるメンバー同士の出会いから始まり（形成期）、メンバーから活発に意見交換ができ一体感を感じながら活動していった（活動期）。その後、映画自主上映会運営の達成を経た後、メンバーから意見がなかなか出なくなり、自然退会する者があった（動乱期）。活動する中で形成された相互信頼感と適応的な集団機能を感じた者はメンバーとして活動を継続したが（遂行期）、自己の成長や変化を再認識し新しい活動へと退会した者、研究会に魅力を感じなくなり退会する者など、新旧のメンバーが入れ替わっていった（分離期）。これらのことから、本研究会も一般的なグループの発達プロセス¹¹⁾を辿ったことが理解できる。このような過程を辿った新旧のメンバーがいる中、あらためてメンバーのニーズは何か、外部から研究会に求められているものは何かについてニーズ調査をしていく必要があると考える。メンバーの職種は看護師が多数を占めるが、薬剤師、作業療法士、ケースワーカーなども参加している。メンバーは自己研鑽、自己実現を目指した勉強の場として研究会に参加している者が多い。メンバーの希望に向けた達成を支える場として今後も存続していく必要性がある。今後も長く活動を継続できるようにメンバーのニーズに沿った活動をしていきたいと考える。

研究会発足当初から当事者と一緒に活動を進めたいという意見があり、2016年度の講演会に当事者、支援者が語るシンポジウムを開催することができた。研究会活動は研究会発起人3名から始まり、精神保健医療福祉関係の支援者間でつながり、当事者を含めた活動へと変化した。

てきた。つまり研究会の構成員は専門職にとどまらず、当事者も参加し、皆がつながる活動へと変化した。このような変化を成すためには、十分な時間が必要だったと考える（集団の凝集性）¹¹⁾。グループが成果を上げるためには凝集性と拡散性の相反する力がつねに働いている¹¹⁾。本研究会メンバーの職種の傾向として看護師が多数を占める。そのため看護師間でつながる意識は強くなる一方で、看護師の視点が強くなり視野が狭くなる危険性をはらんでいたため、積極的に多職種との活動を進めた。しかし、2015年度の時点ではやはり看護師が多い集団となりやすく、一方向からの視点に傾倒する傾向にあった。よって2016年より当事者の参加が始まったことは画期的なことである。研究会は、会の理念である「あたり前の場所であたり前の生活」を目指して活動してきた。この理念を真の意味で実現するために、研究会が最初に作った、支援者が考える「地域において当事者が望む生活」を、当事者の声を聴き、支援者の考えと当事者の考えにずれがないかの確認が必要であった。そして、当事者が望む生活を共に作ろうと、一緒に活動する方向にシフトしていく必要がある。その意味で当事者が望む生活を作るためのスタートラインに立ったともいえる。

今後も活動ごとに変化を見えていながら活動を積み重ねていくことで、研究会の理念に近づき、10年後の香川県の精神保健医療福祉の前進を期待したい。

謝 辞

かがわメンタルヘルス研究会の活動の報告にあたり、参加して下さったメンバー、活動にご協力をしてくださった方々に深く感謝を申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省 (2004). 精神保健医療福祉の改革ビジョン (概要), 2017-8-9 入手, http://mhlw.go.jp/topics/2004/09/dl/tp0902-1_a.pdf
- 2) 厚生労働省 (2014). 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律の一部を改正する法律の概要, 2017-8-9 入手, http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougai-shahukushi/kaisei-seisin/dl/hou_01.pdf
- 3) 香川県の精神保健福祉 (平成22年度版), 香川県健康福祉部障害福祉課, 2010.
- 4) 香川県健康福祉部障害福祉課. 地域移行推進の取り組み, 2017-8-9 入手, <http://www.mhlw.go.jp/file/06-seisakujouhou-12200000-shakaiengo-kyokushougai-hoken-fukushibu/0000154827.pdf>
- 5) 厚生労働省. 精神障害者アウトリーチ推進事業実施要領, 2017-8-9 入手, http://www.mhlw.go.jp/bunya/syougai-hoken/service/dl/chiiki-kou_02.pdf

- 6) 藤森由子, 多田羅光美, 國方弘子ほか. 浦河べてるの家の視察研修から考える精神障害者支援のあり方. 徳島文理大学紀要 86: 87-92, 2013.
- 7) 多田羅光美, 藤森由子, 國方弘子. 精神障がい者の地域移行・地域定着を目的とした精神保健医療福祉専門職の活動に関する研究 第1報-地域生活支援施設見学前後における精神障害に対する社会的態度の変化-. 徳島文理大学研究紀要 87: 66-74, 2014.
- 8) 藤森由子, 多田羅光美, 國方弘子. 精神障がい者の地域移行・地域定着を目的とした精神保健医療福祉専門職の活動に関する研究 第2報-倫理事例検討会前後における精神障害に対する社会的態度の変化-. 徳島文理大学研究紀要 87: 75-94, 2014.
- 9) 山田佳明編著, 新倉健一, 羽田源太郎, 松田啓寿著. “あらゆる小集団活動に役立つQCサークル活動の基本と進め方”, 第1刷, 日科技連出版社, 東京, 2011.
- 10) 駒井伸俊. “考えがまとまる! フィッシュボーン実践ノート術”, 第1版第1刷, アスコム, 東京, 2010.
- 11) 松本功. VII 集団力動論, “精神看護学 I 精神保健学 第5版”, ノーヴェルヒロカワ, 東京, 228-241, 2013.

受付日 2017年9月20日

受理日 2017年12月28日

